

滋賀県西ノ湖の自然と記憶に残る生活

～ 沿岸 8 村落に関する調査研究 ～

丹波 喜徳（社会人コース）

研究の背景と目的

現在、滋賀県の琵琶湖岸における最大の内湖は、近江八幡市と安土町に位置する西ノ湖である。昭和 17 年に小中ノ湖、昭和 22 年に大中ノ湖の干拓事業が始まり、小中ノ湖が昭和 22 年、大中ノ湖が昭和 44 年に完成、津田内湖では昭和 46 年に干拓が完了し、周囲の景観は一変した。この近江八幡市の北部に位置する島学区は、古く平安時代より「奥島荘」「大島郷」の名が残り、昭和 29 年に近江八幡市となって以後も島学区として旧島村の「名」を伝える地域である。本学区を構成する 8 つの村落では干拓事業によって内湖そのものがなくなり、当時の水辺の様子を伝える資料や写真も少なく、高齢化が進む現在、このままではかつての内湖周辺の暮らしについて知る事は益々困難になると予想される。本研究の目的は 8 村落（島学区）の生活と内湖の姿、伝承されていることを調査し、資料として残すことである。当地域に関する先行研究・調査ではその対象がかぎられており、地元記憶を十分に伝えるものとはいいがたい。そこで本研究では地元での聞き取りをはじめさまざまな素材を用いて、内湖沿岸村落で繰り広げられたかつての生活や信仰を詳細に明らかにする。

本研究の構成は、西ノ湖の自然とその現状、8 村落における複合生業、島の信仰と宗像神社に大別される。発表会では 8 村落における複合生業、特に円山地区のヨシ業と漁撈を取り上げる。円山地区はヨシの産地である。地主（葦問屋）は数人で土地を所有していてヨシ地を持たない者は刈り子（葦を刈る人）として地主のヨシを刈りに出かける。ヨシ刈りは今も手鎌で刈り取りが行われ切株が鋭く尖る為に昔は手づくりの下駄を履いてヨシ刈りが行われた。刈り子のヨシ刈り賃は歩合制であり、西川嘉右衛門歳時記によると大正 5 年葦屋同業組合によって 3 尺 5 寸、 \sphericalangle 1 束を金 1 銭 5 厘と協定すると記述されている。（今も 1 束は 3 尺 5 寸と商売の単位として守られている）。ヨシ産業は地主、刈り子、製造販売業者とわかれ古くから分業化された産業である。漁業はカラス貝漁、フナ、コイをタツベ、モンドリ漁具等で、ヨシ巻漁、漬柴漁も行われた。円山の人々はヨシとの関わりが深く其の年のヨシのでき不出来に関心をもっていたのである。

まとめ

近江八幡・安土に位置する内湖は、古里の景観を守り、そこに住む生き物をいつくしみ、琵琶湖のみずをも守る。内湖と密接に関わってきた 8 村落では、水とみどり豊かな自然を上手く融合させた伝統ある暮らしが根付いており、祖先が残した知恵や工夫が多く息づいている。急激に生活が近代化し我々を取り巻く環境も大きく変わった現在、本研究によって先人の残した豊かな遺産を記録し、次世代に伝える資料として少しでも残す手立てが執れたことが幸いである。